

がん教育

2015年度の取り組み始まる。 各地で高まる協会への期待

文部科学省が2014年度から開始した「がんの教育総合支援事業」を受けて、全国の学校現場でがん教育への取り組みが加速している。とはいえ、学校現場では「どう取り組んだら良いのか」と頭を抱えているのが実情だ。そんな中、日本対がん協会への協力を求

める声ますます高まっている。

昨年度からは単発の学校行事で終わらないように、地域の教育現場や保健行政などの意見交換の場を設けて「点から面へ」活動を広げてきた。

今年度は各県の教職員対象研修にも協力することになった。その第一回目

が岩手県での取り組みだ。同県ではまず西和賀町の高校と小学校を推進校に指定してモデル授業を行い、その実践を踏まえて10月に行われる教職員対象の「岩手県学校保健講習会」を開催する。

岩手県西和賀町

生命尊重の地で出張授業



全校生徒に語りかける佐瀬先生

岩手県立西和賀高校で8月18日、全校生徒106人に向けてがん教育のモデル授業が行われた。講師は日本対がん協会とともに精力的にがん教育の出張授業を行っている、順天堂大学大学院医学研究科の佐瀬一洋教授。佐瀬教授は10月の教職員対象の「岩手県学校保健講習会」でも講演する。

西和賀町は県でも有数の豪雪地帯。前身の旧沢内村時代から「豪雪・貧困・多病多死」に苦しめられた歴史を持つが、1962年には全国で初めて乳児死亡率ゼロを達成した自治体として有名

だ。

県教育委員会指導主事兼保健体育主事の高橋雅恵さんは西和賀高校をモデル授業の場にした理由に、やはり生命尊重の歴史を持つ地だからと話す。菅野慎一校長も以前病弱な子どもたちが通う学校に勤務したことがあり、小児がんの子どもたちの教育に携わった経験を持つ。そんな背景からモデル授業が実現した。

西和賀高校ではモデル授業に先立ち、養護教諭の及川明奈先生が学年ごとにがんについて正しく理解するための事前指導を行った。がんの基礎知識を教え、グループ毎にがんについての疑問や質問を見つけてもらった。当日掲示された生徒たちの質問は、がんの仕組みから、どういう経過を辿るのか、がんになった時の気持ち、家族ががんになったらどういう風に支えてあげたら良いのかなど、多岐にわた

り、その問題意識の高さに佐瀬教授も驚いていた。

佐瀬教授の授業のポイントは、①がんが増えたのは長寿化の結果②予防と早期発見が大切③誤った意識は病気より怖い、正しい情報を、の3点。特に正しい情報の大切さについては、自身が骨軟部肉腫とわかった時の体験をもとに、映画やドラマの誤った情報に振り回されないようにと話し、子どもたちも真剣に聴き入っていた。



生徒たちの質問を掲示

意見交換会 時間延長して熱心なディスカッション

講演の後に意見交換会が行われた。西和賀高校の教員の他、岩手県医師会理事、次に授業を行う町立小学校の教諭、養護教諭や校長、県や町の教育委員会、以前からがんを含む生活習慣病に関する出前授業を実施してきた日本対がん協会岩手県支部など、大勢の関係者が参加して、佐瀬教授を中心に熱心な意見交換を行った。

小学校の教諭からは「何を教えたらいいのかわずかしい。予防教育はできるが、予防してもがんに

なってしまう人もいる。脅かしてなくどう教えるか」、「小学生は単純なので、ちょっとした情報でころっと考えが変わってしまう。だからこそ一層慎重さが必要」など難しさを語る意見が多かった。岩手県支部からは「小学生の教材には『がんちゃんの冒険』が好評だった。子どもの反応がとてもよかった」という声も。

高校生については「高校生が最適、グループワークをすると反応が良かった」「職業につなげるよう

な面を入れると未来志向で良い」など好意的な意見が多かった。

意見交換会の参加者にも自分がんを経験したり、身内をがんで亡くしたりした人もおり、「自分の経験はまだ冷静には話せない」という率直な声もあった。一方、「自分もがんを経験したが、その経験からいってもやはり知識は絶対大事」という意見もあり、様々な立場から熱心な意見交換が行われた。